



“Dr. ジャン・シーのヒューマンファクター研究室”

No. 30 〈リスク評価〉

タイトル：作業計画時には十分なリスク評価を！

【事例】

ドラム缶搬出に際し、点検するために蓋を開けたところ、不要となった廃棄物が収納されていることを確認した。

本来であれば、作業計画において廃棄物処理手順まで策定すべきところ、主要作業のみの計画であったため、廃棄物をドラム缶に収納しそのまま放置していた。さらに、仮置き等の表示を明確にすべきところ、表示は「空」としたままであった。

【ヒューマンファクターの視点から】

現場では、様々な作業が輻輳しています。発電所では、一つのミスが他の作業や機器に好ましくない影響を与えるリスクが存在しています。計画作成段階やその後の管理においては、プラントに思わぬ影響を与えることも考慮して、業務の計画者が事前に十分なリスク評価をしましょう。

今回の事例では、原因として「作業計画」と「識別管理」の不備が重畳していますが、どちらも共通要因として「リスク認識不足」とそれによる「不十分なリスク評価」があります。このため、2つの原因において影響範囲の推定が不十分となってしまいました。

個別原因の対策としては、計画時には最終処置まできちんと規定すること、および明確な判別ルールの規定により識別管理を徹底することが望まれます。抜本的な対策としては、基本姿勢としてプラントには様々なリスク要因があることを認識し、作業における影響範囲を推定するリスク評価をルーチン化し、評価結果とその対応策を作業計画や手順書等に反映することです。特に変更管理においては、十分なリスク評価とそれに基づく事前の対応が望まれます。

「リスク認識」をもって「リスク評価」を確実に実施しましょう！